

亀井よし子訳

ボビー・アン・メイソン 短篇集 下

Shiloh and Other Stories

Bobbie Ann Mason



＜訳者略歴＞

亀井よし子（かめい・よしこ）

1941年生まれ。翻訳家。

＜主な訳書＞

『カインの影』（V. ビューグリオシー、創林社）

『読み聞かせ——この素晴らしい世界』（ジム・トレリス、高文研）

『イン・カントリー』（ボビー・アン・メイソン、ブロンズ新社）

『燃える家』（アン・ビーティ、ブロンズ新社）

『鉄道大陸を行く』『続鉄道大陸を行く』（クリストファー・ポートウェ
イ、冬樹社）

＜主な共訳書＞

『プラネット・アース』（ジョナサン・ワイナー、旺文社）

『ラヴ・ストーリーズⅠ、Ⅱ、Ⅲ』（チップ・ヘンダーソン編、早川書房）

ボビー・アン・メイソン短篇集（下） 現代アメリカ文学叢書①—Ⅱ

1989年12月5日 印刷

1989年12月15日 発行

定価はカバーに
表示してあります

著 者 ボビー・アン・メイソン

訳 者 亀 井 よ し 子

発行者 竹 内 淳 夫

〒102 東京都千代田区富士見2-2-2

発行所 株式会社 彩 流 社

電話 03 (234) 5931 振替・東京 9-55239

印刷 錦平河工業

製本 銚青木製本

Printed in Japan

落丁本・乱丁本はお取替いたします。

0097-971-2900

Shiloh
and Other
Stories

Bobbie Ann Mason

亀井よし子 訳

ボビー・アン・メ
森・マゼン

江苏工业学院图书馆
藏 短篇小说 章

〈下〉

SHILOH AND OTHER STORIES

by

BOBBIE ANN MASON

Copyright © 1982 by Bobbie Ann Mason

This translation published in arrangement

with Rogers, Coleridge & White Ltd.

through The English Agency (Japan) Ltd.

Published in Japan in 1989 by SAIRYUSHA

目次 Contents

土地つ子と流れ者	Residents and Transients	5
修養会	The Retreat	23
海	The Ocean	49
墓掃除の日	Graveyard Day	79
ナンシー・カルペパー	Nancy Culpepper	103
ただいま省エネ実行中	Lying Doggo	131
ニューウェーブフォーマット	A New-Wave Format	161
第三月曜日	Third Monday	193
訳者あとがき		219

土地づ子と流れ者 Residents and Transients

夫が仕事でルイヴィルに行ってから、驚いたことに、わたしに恋人ができた。夫のステイヴンは新しい仕事を始めるのと、二人で住むにふさわしい家を見つけるために、先に行った。わたしもあとから行くことになっている。夫が働いているのは例の転勤がひんばんにある会社のひとつで、わたしも最初のうちはあとから行くことに同意していた。だが、いまはルイヴィルには行きたくない。どこにも行きたくないのだ。

ラリーはわたしたちのかかりつけの歯科医である。少し前、すでに夏に入っていたころだが、郵便局で彼に会った。だが、最初は彼とはわからなかった。診察着を着ていなかったし、ドリルも持っていないからだ。それでもしばらくして、わたしたちは言葉を交わした——「暑いですね」とか何とか。その後、彼の青いフォード・レンジャーⅫが畑の向こうの道路を走るのが目につくようになった。わたしたちはほぼ同じ年齢で、ラリーはこの地で生まれ育った。それはわたしも同じなのだが、わたしは八年間この町を離れていた。もっと高い学問をおさめるために。そして三年前にこのケンタッキーに戻ってきた。両親の健康がすぐれなくなったからだ。いま、その両親はフロリダに住んでいる。しかしわたしはこの地に残った。いったいなぜここを離れたりしたのだろう、と思ひながら。

ここに帰ってまもなく、わたしはステイヴンと出会い、一年たたないうちに結婚した。彼は最近この地に増えつつある、いわゆるヤンキーの一人である。ヤンキーが増えている——それは代々この地に住みついている土地っ子の心を乱す事実でもある。以前のわたしなら、彼をヤンキーなどと呼ぶことはなかったはずだ。わたし自身がかんりのアウトサイダーなのだから。もっともわたしの場合は、ここに帰ってからというもの、この地に溶け込もうと努力はしている。わたしがこんなことをいうのは、町が侵略されつつあるとでもいわんばかりに、人々が懷疑的かつ絶望的な言葉を口にするのを小耳にはさむからである。いまでは小学生までが「てめえら」などと北部人のような言葉を使うし、麻薬を吸ったりもしている。わたしには内気な田舎の子供たちが、ヨーロッパにいたころのことを北部なまりで得意げにしゃべる転校生の話に耳を傾けている姿が目につく。そういった影響に、土地の人々はいらだっている。このあたりの人は、この町を出るくらいなら死んだほうがいいと思う人がほとんどである。だが、中には、ルイヴィルのチャールズダウンスは世界一いいところのはずだ、と思っている人もいることはいる。あなたたちは夢見る人なのよ、とわたしならそういう人たちにいつてやれる。

「また町なかに住むなんて考えられないわ」とわたしは夫にいった。目に見える範囲に何軒も家がある、ようなところに住むのはいやだ、とわたしは何週間も不平をいい続けた。わたしにはトウモロコシ畑が必要なのだ。両親がフロリダに行ったあと、わたしとステイヴンは両親の古い農家に移った。両親に代わって家の面倒を見るためだ。わたしはその家の堂々たるたたずまい、突然変異のシロバナチョウセンアサガオの群れのように、畑からすくと生えているといった感じが大好き

だ。古びた白い板壁、傾^{かし}いだ農作業小屋が気に入っている。だが、この家も今度の冬、トウモロコシの穫り入れが終わったら、売り払われることになっている。それまでにはわたしもルイヴィルに行かなければならない。両親には、わたしが家具のオークションに立ち合う、と約束してある。母にはとても耐えられないだろうと思ったからだ。現に母は、身の回りのものを何もかも売り払い、そのあとがらんどろになった家にひとり住み続けてついには力づくで追い出される破目になった未亡人のことを繰り返して話していた。未亡人はそれから一年たたずに癌で死んだという。「傷心が癌を連れてくるんだよ」と母はいった。その母は何もかもをそのままにしてフロリダへ行った。まるでちょっとお買い物に、といった調子で。

農場と一緒に猫たちを引き受けることになった。ステイヴンとわたしの姿を見て、猫たちは徐々に納屋から母屋へ引っ越してきた。いまはその猫たちはわたしに課せられた責任のように思える。まるでわたしの犯した罪のような、未婚のままに産んでしまった子供たちのような感じなのだ。猫たちの名はピート、ドナルド、ロジャー、マイク、ジュディ、ブレンダ、エレン、そしてパッツィ。恋人になって三週間のラリーに彼らの名を空^{そら}でいって聞かせながら、わたしはばかばかしさに襲われる。「彼らの名前を全部いえるのか?」といわれてそらんじてみせたのだ。

「何でこと訊くの?」といいながら、わたしは夫の新しい仕事のことを思い出す。夫のステイヴンは南部一帯の大会を、ワードプロセッサーの実演をして回っている。タイプしたことを記憶できる、何千ドルもする高級タイプライターである。八匹の猫の名前を憶えるくらい、そのタイプライターほどの頭脳はいらない。

「二匹と同じのはいないのよ」とわたしは手に負えない人ねえ、というようにラリーに答える。

わたしたちがいるのは缶詰め作りのためのキッチンである。このキッチンは風通しのよい裏口のボーチに仕つけられていて、わたしはここを猫たちのために使っている。流しとキャビネットがついており、流しは猫たちの食器を洗うために、キャビネットは餌をしまうために使っているのだ。このキッチンは母の自慢だった。ここの加圧式缶詰め製造機でインゲンマメを二十分間処理し、ウォーターバスでトマトジュースを十五分間滅菌処理したのだ。その母はいまモービルハウスに住み、買った食料品の値段をいちいち手紙で知らせてくる。

缶詰め作り用のキッチンから、ラリーとわたしはトウモロコシ畑をとつくりと見つめる。そよそよと吹く逆風のおかげで、ここが家じゅうで一番涼しく、心地よい。家はトウモロコシ畑のまん中に立っていて、土のむき出しの小径が道路に向かって伸びている。小径の長さはおよそ八百メートル。猫たちがフェンスのあたりをうろついている。境界線をパトロールしているのだ。わたしは彼らにフリスキーズを与え、彼らのクッションに掃除機をかける。彼らがわたしにと持ち込むウサギには見て見ぬふりをする。ラリーが片手で一匹の猫を撫で、もう一方の手でわたしの髪を撫でる。きみみたいな人に会ったことがない、とラリーがいう。彼はわたしのことをメアリーではなくメアリー・スウと呼ぶ。子供るとき以来、わたしのことをメアリー・スウと呼んだ人はいない。

ラリーがうちに来るようになったのは、わたしが六カ月ごとの歯の検診を受けた直後のことだ。わたしたちのあいだに、どんなシグナルが通い合ったのか思い出せない。だが、突然、彼が立ち寄るのは当然、と思えるようになったのだ。あの日、彼のトラックが表の道路を通りかかるのが見え

たとき、わたしは、きつとうちの小径に入ってくる、と思った。トラックにはクロームメッキの筋が一本入っている。そのせいで全体がロケットのように見える。おまけに両側のドアには炎の絵が描いてある。

「アイスクリームを持ってきた」とラリーがいった。

「歯医者さんが家庭訪問してくれるなんて知らなかったわ。どんなアイスクリーム？」

「チョコミントが好きじゃないかと思ったんだけど」

「あたり」

「わかってるんだよ、きみが甘党だったことは」

「あたしを虫歯にしようってわけね。そうすれば一本につき三十ドルふんどくれるから」

わたしは皿を持ってくるために網戸を開けた。猫が一匹中に入り、別の一匹が出ていった。見張り番の交替なのだ。ラリーとわたしはボーチに坐ってアイスクリームを食べ、トウモロコシのあいだにいるカラスを眺めた。少し前に降った雨のせいで、トウモロコシは急に伸びていた。

「ルイヴィルへは行くなよ」とラリーがいった。「ケンタッキーでもこのあたりが一番きれいなところだぜ。ぼくなら何をやるかといわれてもここを出てつたりしないな」

「あたし、昔はそんなこと思いもしなかったわ。もう、一刻も早く出ていきたくてうずうずしてたわ！」アイスクリームはぞくぞくするほど冷たかった。ラリーはあたしのことを羨んでいるのだろうか、と思った。彼に比べれば、わたしは相当な旅の経験者だった。アスペンのコンミュニティに住んだこともあるし、バックバックを背負ってロッキーマウンテンを歩いたこともある。初めての女性

ポーターの一人として、ニューヨークからカンザスシティのあいだを走るナショナル・リミテッドで働いたこともある。ラリーのほうはハイスクール時代、いつも騒動を引き起こす男として有名だった。そのため、彼が歯科医になり、結婚して腰を落ち着けたときには町じゅうがびっくりした。その彼もいまは離婚している。

あのむし暑い日、ラリーとわたしはいつまでもビーチに坐っていた。互いに、何か外的なきっかけを待っていた。天候の急変か何かの物音、あるいは何かのできごとを——二人が抱き合うきっかけになるものを待っていた。結局、わたしが歯に詰めてもらったばかりのものを話したのが、そのきっかけになった。ラリーは飛び上がるように立って、わたしの口をのぞき込んだ。

「やっぱりレントゲンを撮ってみるべきだったんだよ」とラリーがいった。

「いったでしよ、あたしはあの放射線つてものを信用してないんだ、って」

「放射線の量なんて微々たるものだよ」わたしの顎をつかみながら、ラリーがいった。口はワードプロセッサード、何かいおうとしたときに、不意にそんな思いが浮かんた。

「それに」とラリーがいった。「ぼくは放射線のかけらをいっさい逃さないように、必ず鉛のエプロンを使うようにしてる」

「何の話？」と叫んで、わたしはぐいと彼の手を逃れた。こなごなに砕けたX線が部屋の中をびゅんびゅん飛び回っている情景が脳裏に浮かんた。ラリーがわたしの膝を軽く叩いた。

「何か音楽をかけなきゃ」とわたしはいった。彼はわたしについて中に入った。

ステイヴンから電話がかかっている。午後の三時。わたしはいま夕食を食べている——ボーク・アンド・ビーンズとカテージチーズ、そしてデイルのピクルス。ステイヴンがいなくなつて以来、わたしの日常は狂っている。

「家が見つかったぞ！」ステイヴンが興奮した声でいう。聞き慣れた声。彼の姿までが見えるようだ。そしてわたしは、自分が彼がいなくて淋しがつているのを悟る。「今度の週末にこっちに来て、家を見てもらいたいんだ」とステイヴンがいう。

「行かなきゃだめ？」わたしの口の中にはボーク・アンド・ビーンズがいっぱいにつまっている。「きみに見てもらってからじゃなきゃ、買えないよ」

「あたしはかまわないのよ、どんな家だって」

「そんなことないさ。だけど、気に入ってもらえると思うよ。寝室が三つのレンガ造りで、車が二台入るガレージと、仕上げのすんだ地下室と、食堂用のちよつとしたスペースと、中庭と——」
「缶詰め作り用のキッチンはあるかしら？」とわたしは迫る。

ステイヴンが笑う。「いいや。だけど、娯楽室があるぞ」

娯楽室と聞いてぞっとする。「ばかな話だってことはわかってるの、だけど、裏庭に猫用の小屋を作らなきゃならないと思うのよ。交通事故に合わないように」

わたしはステイヴンにテレビのトークショーで見たニュージャージーの獣医師の話をする。その獣医は郊外にある自宅の庭で雌のアフリカライオンを二頭、オセロットを一頭、トラネコを三頭飼っており、それらを自由に家に入出りさせているのだという。「猫科の動物はさほど扱いにくく

ありませんよ」と彼はいつていた。

「きみ、それはいくら何でもちょっとばかり行き過ぎてもものじゃないか？」とステイヴンが尋ねる。不安げな声だ。彼は、わたしがどこまで行き過ぎているか、疑ってもいない。口の中に残った食べ物の最後のかけらを、わたしはやっとの思いで飲み下す。まるで罪のかけらを飲み下すように。

「ねえ、どう思う？」とわたしはだしぬけに尋ねる。

「どう思うって、何がさ」

わたしは黙り込む。腕にエレンを抱いている。少し前に膣感染症にかかった猫だ。ある日、獣医に彼女を連れて行ってレントゲンをかけてもらったところ、妊娠していることがわかった。結局、お腹の仔は死んだ。レントゲンがいけなかったのだ。そのときの流産が不完全だったために、エレンは子宮腫腫という珍しい病気を併発し、子宮剥出する破目になった。わたしはそれを両親にこと細かに手紙で知らせた。きつと心配するだろうと思っていた。ところが両親からの返事にはそのことはひとことも触れられてはいなかった。二人は、この農場が売れたら買う予定でいる分譲アパートのことで頭がいっぱいなのだ。いまステイヴンはわたしたちの資金作りのことを話し、銀行に行つてすべきことをわたしにあれこれ指示している。家を買うとなれば、複雑な抵当を設定しなければならぬのだという。

「不動産を即金で買うってことは」とステイヴンがいう。「資産に流動性がなくなるってことなんだよ」

「父は昔から、借金はするな、っていつてたわ」

「いまどき、そういうのは得策じゃないんだよ」

「父はアパートを即金で買うつもりよ」

「そんなのばかばかしいよ」

少し前のこと、ステイーヴンとわたしは投資カウンセラーのところに相談に行った。カウンセラーはわたしたちに、にこりともせず、「可能性を最大限にする投資方法を選びたいとおっしゃるんですね」といった。わたしはそのカウンセラーを結婚カウンセラー、それも不気味なセックス治療士か何かと混同していた。

いま、わたしは頭の中で歯科医のうがい用ボウルに流れ込む水のことを考えている。わたしが子供のころは、うがい用のボウルの水はいつも流れっぱなしになっていた。ラリーのボウルには節水用の停止ボタンがついている。ステイーヴンは柔軟性と流動資産についてしゃべっている。そのとき、わたしは不意に、ワードプロセシングという言葉も一語として考えると、流れるような響きがある、と気づく。ステイーヴンのワードプロセッサーは一日にいったい何十億ぐらいの言葉を、それも忘れることなく処理できるのだろうか。ハウ・メニー・ペックス・オブ・ピクルド・ペパーズ・キャノン・ピーター・パイパー・ピック? ピーター・パイパーはピクルスにしたピーマンを何ペック摘めるか? (訳註——マザーグースに出てくる。早口言葉) ピクルスにしたピーマンなんか摘めるわけがないでしょ、と傲然とステイーヴンにいつてやりたい。彼にそんな質問をされたともいうように。ピーマンは摘んだあとでなきやピクルスにはできないのよ、と。まるではつきりさせておかなけれ

ばならないことがあるのだ、というように。

ラリーはほとんど毎日のようにやって来る。その日一日分の口のオーバーホールを終えてからやって来るのだ。彼の職業のこの奇妙さをわたしはからかう。ときには彼を怖がるふりもしてみせる。歯をぎゅっとくいしばったままにやっと笑い、想像上のドリルを撃退してやるのだ。ラリーの歯はすきまだらけ。歯列矯正器をつければよかったのに、とわたしはいう。もう手遅れさ、とラリーが答える。

わたしたちがベッドに入っていると、猫たちが喉をごろごろ鳴らしながら、そのベッドを登ったり降りたりする。ラリーはそれに気づいていないようだ。わたしは猫には慣れている。猫というのは、どうやら、目の前で繰り広げられていることならどんなことにでも、首を突っ込みたがるものらしい。ピートには蝶々を追いか回り回す趣味がある。蝶の姿を見失うと、哀れっぽい鳴き声をあげながら、宙を探す。その姿はまるで捨てられた猫のようだ。ブレンダはペーパークリップで遊ぶ。片方の前肢でいとも簡単にクリップを留められるのが気に入っているのだ。彼女は同じようなやり方でクモを襲う。クモが脚を縮めると、そのクモを落とす。

ラリーが猫たちを見つめている。だが、彼はめったに猫たちを批評しない。きょう、彼はブレンダの奇妙な目に気づく。片方が青で、もう片方が黄色なのだ。わたしはラリーに彼女のペーパークリップの芸当を披露する。わたしたちはいま、缶詰め作り用のキッチンにいる。陽の光が薄れはじめている。

「もう一杯飲むかい」とラリーが尋ねる。

「ううん」

「とにかく、もう一杯作ってくるよ」

わたしたちは二人ともブラディ・マリーを飲んでゐる。母が作った缶詰めのトマトジュースで作ったものだ。地下室にはびん詰め類がずらりと並んでゐる。わたしがいま母の家で、母の作ったトマトジュースを飲みながらしていることを知れば、母は屈辱感にさいなまれるだろう。

ラリーが飲み物と、水っぽくなったグリルドチーズ・サンドイッチを持ってきてくれる。

「歯医者さんって、ものを品よく几帳面に作るっていわれてるわよね」とわたし。「ゼリーを型に入れて作るのなんかうまいんでしょね、きっと。入れ歯を作るみたいに作ったりして」

ラリーが笑う。彼はわたしがふざけていると思つてゐる。

先日、わたしは彼に単気筒のセスナ機に乗せてもらった。西ケンタッキーの上空を旋回し、地上を眺めた。この農場の上を飛んだとき、がたびしときしむ干し草車に乗って、畑すれすれに飛んでいるような気がした。そして、干し草の山にそって飛ぶ鳥についての夢を歌った、ディラン・トーマスの詩を思い出した。眼下には八十エーカーにおよぶトウモロコシ畑と牧草地が、整然とした矩形を描いていた。わたしはまもなく三十になる。男が二人に猫が八匹、虫歯の穴はゼロ。ある日、わたしは猫の数をかぞえながら、知らず知らずに自分も数に入れていたことがある。

ラリーとわたしは客間でモノポリー・ゲームをしている。客間の飾り棚の上には、小型の刺しゅう入りナプキンやさまざまな小物があふれている。わたしが毎日、母のためにとおかなければ